薬師寺東塔の調査

―第622次

1　調査の経緯と目的

薬師寺東塔（以下、東塔と呼称する）は、薬師寺において唯一創建時の姿をとどめる建築物であり、三重塔の各層に裳階が取り付く形式は、ほかに例をみない。

平成21年度から着手された東塔修理工事にともない、平成26・27年度に奈文研と奈良県立橿原考古学研究所が合同で発掘調査（平城第536・554次）をおこない、創建時の基壇およびその外周部の様相や、創建以降の改修の履歴をあきらかにした（『薬師寺東塔基壇 国宝薬師寺東塔保存修理事業にともなう発掘調査概報』薬師寺、2016）。しかしながら、これらの調査では、修理工事用の素屋根基礎が北面と南面の階段上に位置していたため、未調査になっていた。

今回は北面階段部（以下、北区と呼称）と南面階段部（以下、南区と呼称）に調査区を設定し、両階段の規模と構造を確認することを目的とした（図196）。あわせて、階段外周部の犬走りや雨落溝等の施設の有無とその構造、東塔周囲の修理等にともなう痕跡の確認も目的とした。調査面積は北区が24㎡、南区が27㎡である。調査は５月25日に開始し、７月17日に終了した。この調査も奈良県立橿原考古学研究所と合同でおこなった。

なお、一連の発掘調査成果は『薬師寺東塔修理工事報告書 発掘調査編』で詳述しており、本報告は創建時の遺構の概要を述べるにとどまる。

2　基本層序

基壇外周部の基本層序は、現地表面（標高60.5m前後）以下、上から表土層（厚さ15～50㎝）、明治～昭和前期の遺物包含層（厚さ10～15㎝）、近世の遺物包含層（厚さ20～35㎝）、伽藍造営にともなう整地土（第１次整地土、厚さ25～70㎝）、伽藍造営前の自然堆積土（検出面の標高59.4～59.1m以下）である（図197・198）。基壇および階段周囲は、第１次整地土と近世の遺物包含層との間に、基壇外装・犬走り・雨落溝等を構築する際の整地層（第２次整地土、検出面の標高59.7～59.8m、厚さ５～20㎝）がある。創建期の地表面は標高59.8～60.0mである。

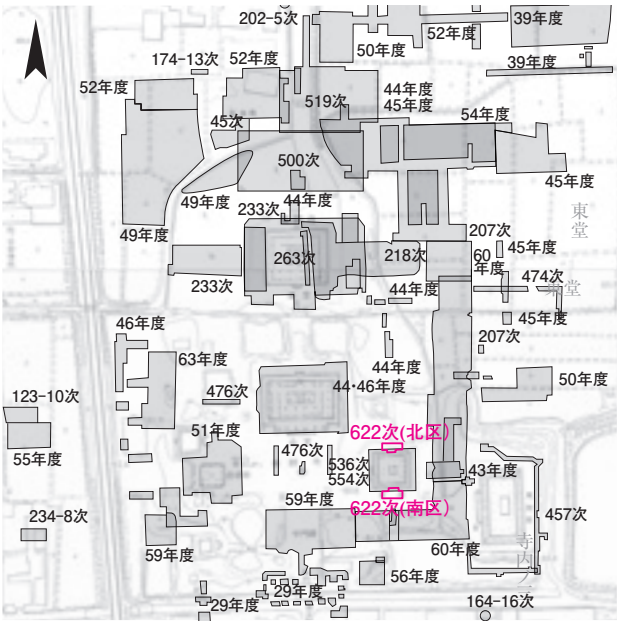

図196　第622次調査区位置図　1：3000

3　検出遺構

北・南面の階段遺構は階段積土のほか耳石の地覆石の一部およびその据付掘方と抜取溝等を検出した。基壇より突出する耳石の地覆石が階段最下段の踏石に連続する構造である。地覆石上面には、外端から15㎝の位置に南北に１～３㎝の決りを造り出し、羽目石との仕口とする（図203右）。階段外側には犬走りと雨落溝を設けている。なお、これら創建期の遺構は東半部を平面検出のみとし、遺構の保存をはかった。　（前川　歩）

北面階段SX10718　階段積土、東側の耳石の地覆石SX10734、西側の耳石の地覆石SX10735、耳石の地覆石据付掘方SD10851ア、最下段の踏石据付掘方SD10851イ、耳石の地覆石抜取溝SD10739ア、最下段の踏石抜取溝SD10739イを検出した（図197・199・200）。抜取溝SD10739は平面コの字形をなすが、西側の地覆石抜取溝は後世の撹乱や削平により部分的に幅が狭くなる（図197・203左）。階段は第２次整地土上で検出した１時期分のみで、創建時の基壇にともなう。

階段積土は上部を大きく壊されているが、第２次整地土上面から最大で高さ60㎝ほどが遺存する（図200）。

耳石の地覆石は、北半部を欠損するものの、基壇北面との取付部で東西各１石ずつを残す。SX10734は幅46㎝、長さ20㎝以上、厚さ10㎝以上。SX10735は幅40㎝、長さ95㎝以上、厚さ25㎝で、北端部では上部を大きく壊され、最下

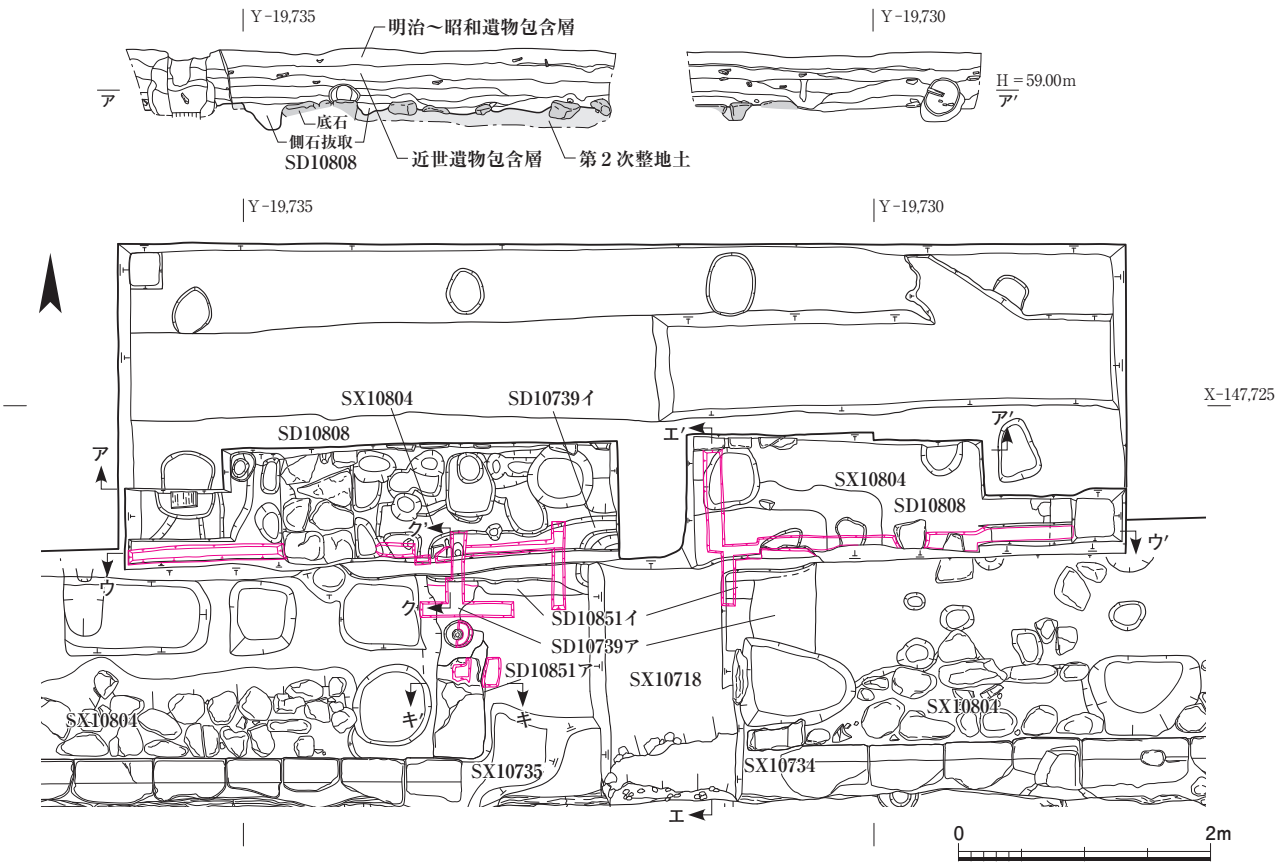

図197　北区遺構図・北壁土層図　1：60

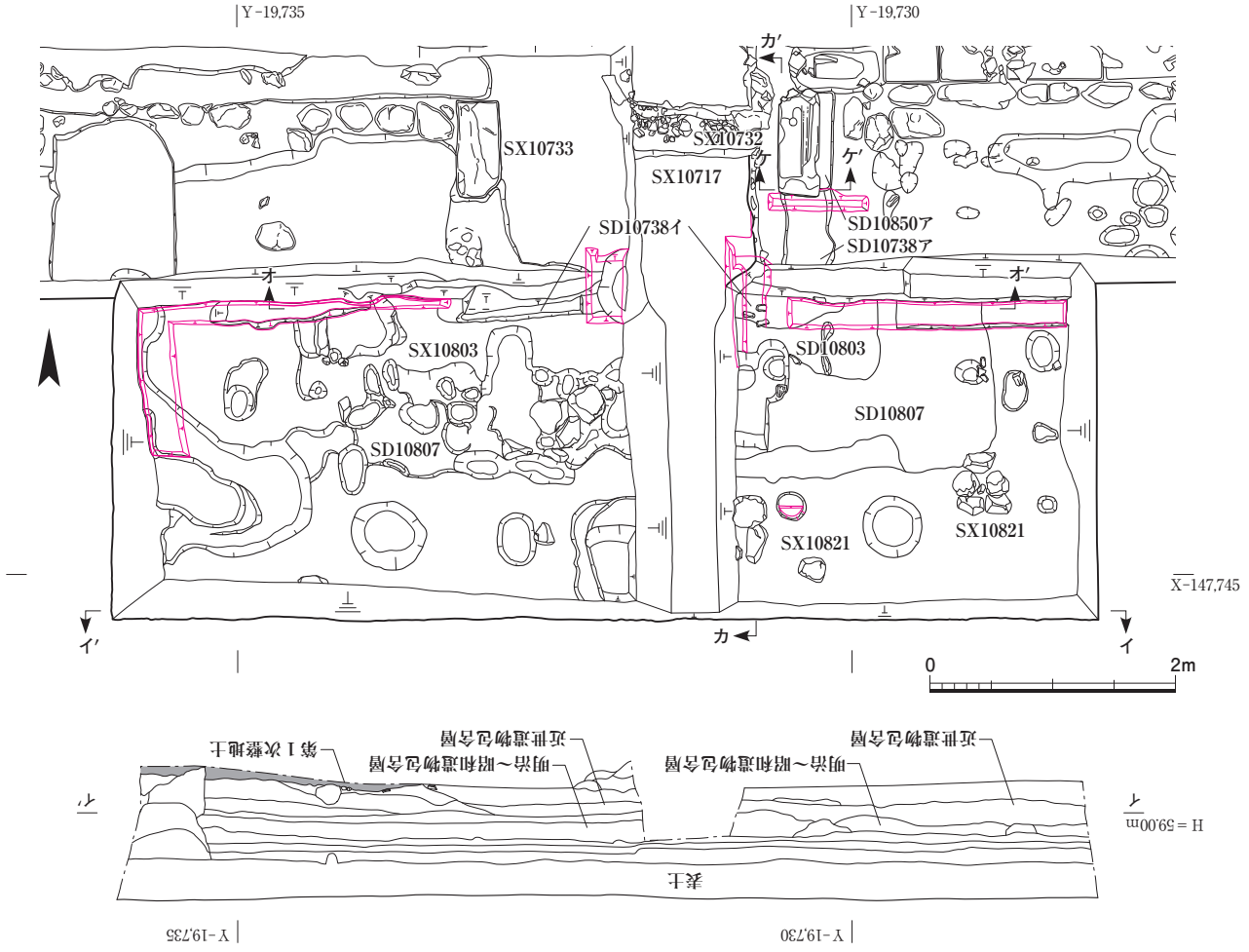

図198　南区遺構図・南壁土層図　1：60

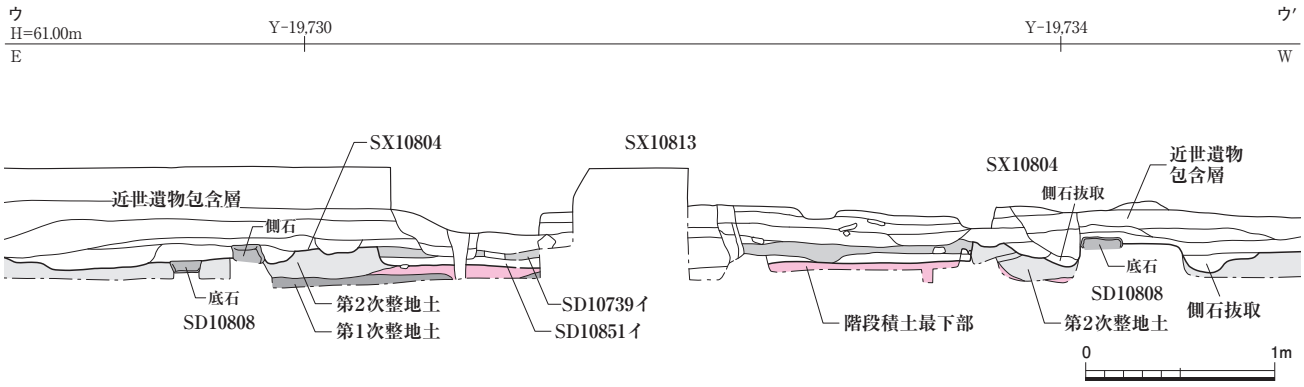

図199　北面階段北端断面図　1：40

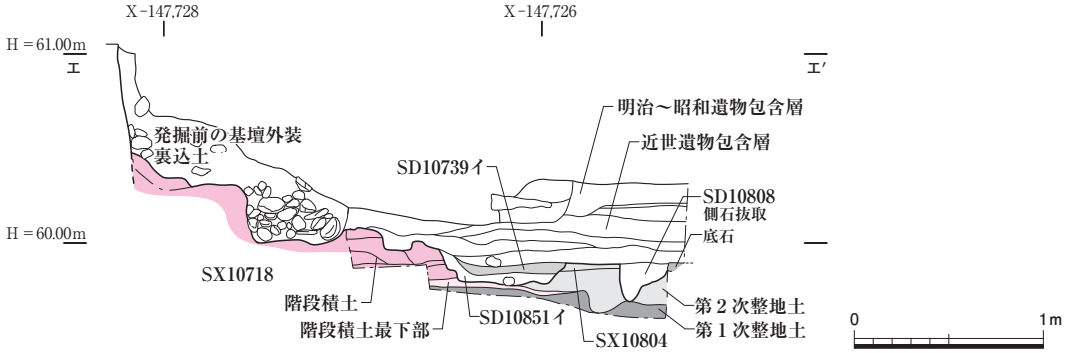

図200　北面階段断面図　1：40

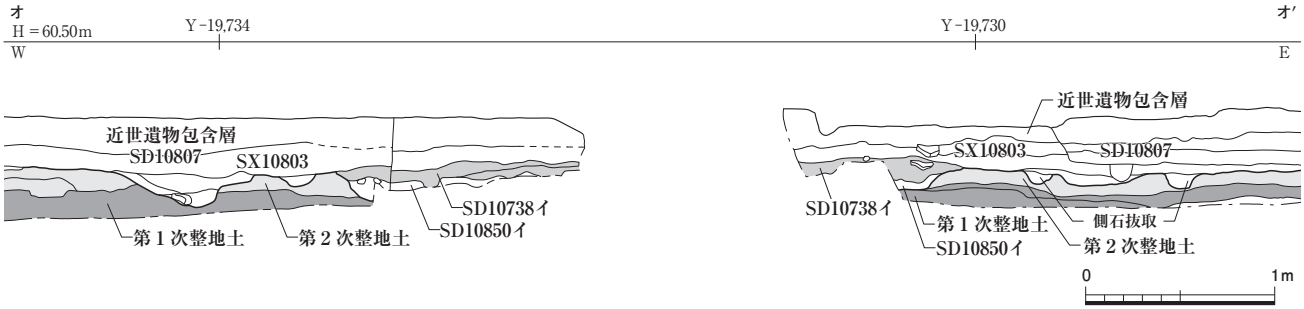

図201　南面階段南端断面図　1：40

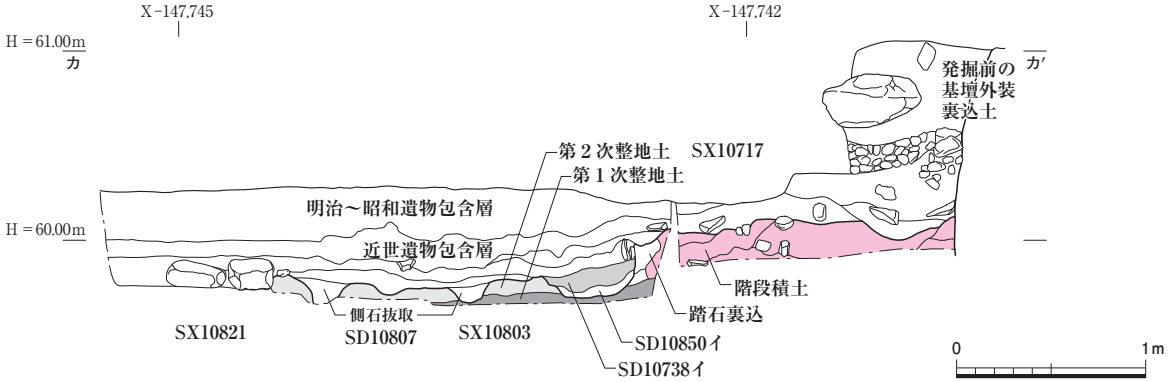

図202　南面階段断面図　1：40

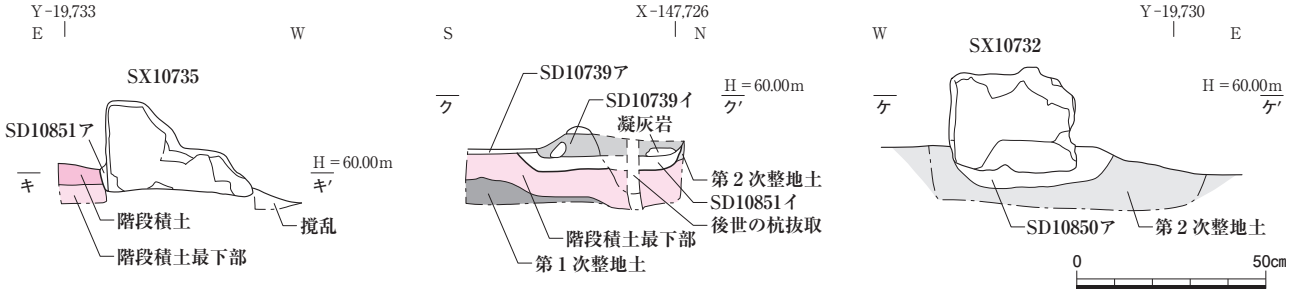

図203　北面階段・南面階段詳細断面図 1：20 （左：北面階段西側地覆石、中央：北面階段北端、右：南面階段地覆石）

部をわずかに残すのみである。東西耳石の地覆石外々間距離は約2.94m。SD10739アは遺存状態の良い東側で幅50cm前後。SD10851アは、SX10735の内側でわずかに検出したにとどまるが、階段積土をほぼ垂直に掘り込む（図203左）。

最下段の踏石は抜き取られ、基本的には遺存していない。ただし、西北隅では抜取溝SD10739イの底面、すなわち据付掘方SD10851イ埋土の上面で、一辺９cmの凝灰岩片のほか凝灰岩粉が面的に広がっていた（図203中央）。これらは最下段の踏石底部の痕跡である可能性が高い。SD10739イは、幅33～60cm、深さ５～９cm。SD10851イは、断面では、遺存する幅42～67cm、深さ９～12cm。SD10739イの北肩から基壇の地覆石北辺までの距離は約1.79m。

西側の地覆石SX10735は据付掘方SD10851アの底面に直接据えられている（図203左）。いっぽう、最下段の踏石は、SD10851アに比べて５cmほど深い据付掘方を掘削した後、一部埋め戻し、高さを調節した上で据えられている（図203中央）。SD10851ア底面とSD10851イ埋土上面は標高59.85m付近で共通しており、地覆石と踏石の底面標高を揃える意図がうかがえる。　**（大澤正吾）**

南面階段SX10717　階段積土、西側の耳石の地覆石SX10733、耳石の地覆石据付掘方SD10850ア、最下段の踏石据付掘方SD10850イ、耳石の地覆石抜取溝SD10738ア、最下段の踏石抜取溝SD10738イを検出した（図198・201・202）。SD10738はコの字形の平面形をなす。階段は第２次整地土上で検出した１時期分のみで、創建時の基壇にともなう。

階段積土は上部を大きく削平されるも、第２次整地土上面から最大で25cmほど遺存する（図202）。

耳石の地覆石は基壇との取付部に東西それぞれ１石ずつ遺存する。SX10733は南端部分が削られ、幅36cm、長さ79cm以上、厚さ28cm。SX10732は南端部分が削られ、幅34cm、長さ88cm以上、厚さ27cm。東西耳石の地覆石の外々間距離は約2.95m。SD10738アは幅36～55cm、SD10850アは幅約42cmで、深さは地覆石下端からいずれも約４cmである。

SD10738イは、幅45～50cm、深さ８～14cm。SD10850イは断面でかろうじて確認できたにとどまり、遺存する幅は42～49cm、深さは11～19cmで、標高は59.7m前後である（図201・202）。

創建時の犬走りSX10803・SX10804　北面および南面階段の外周部において、階段の外側をめぐる玉石敷の犬走りSX10803（南面）、SX10804（北面）を確認した。北、南面とも玉石の抜取穴を検出した。いずれも第２次整地土上面で検出した１時期分のみで、西塔の成果とも整合し創建基壇にともなうものとみてよい。

後述する外側の雨落溝の側石抜取穴の外面までで、幅は約45cm。ただし、北面階段東側の犬走りの東辺は東にずれており幅が広い。断面で確認した石材が原位置を保つ側石とみれば、犬走り幅は80cm程度となり、原位置を保っていない場合は平面検出の所見から65cm程度の幅となる。北、南面とも犬走り部には、第１次整地土上に第２次整地土が７～15cm残存する。犬走りは第２次整地土造成時につくられ、玉石が据え付けられたとみられる。

創建時の雨落溝SD10807・SD10808　北面および南面階段の外周部において犬走りの外側に雨落溝SD10807（南面）、SD10808（北面）を確認した。両面で底石および側石の抜取穴を検出し、北面では底石を一部検出した。遺構は１時期分のみで、いずれも第２次整地土上面で検出した。以上の様相は、西塔の雨落溝とも酷似し、創建時の雨落溝とみてよい。溝幅は、底石外々間で約55cm、溝の深さは５～10cmである。底石は北面階段西側に良く残り、溝幅方向に概ね２石並べる。１石の大きさは一辺20～30cm、厚さ10～15cmで、底石上面の標高は59.9m前後である。側石の抜取穴は、幅20～25cm、長さ40～45cm、深さ10～20cmで、長辺を雨落溝直進方向に揃える。

創建時の石敷SX10821　南面の雨落溝の外側に石敷SX10821を第２次整地土上面で確認した。西塔の成果から、創建時の石敷とみて誤りない。石敷にともなう円礫の大部分は、後世の撹乱で抜き取られ、抜取穴を検出するにとどまったが、原位置を保っているとみられる玉石を部分的に検出した。玉石は、径20cm前後、厚さ15～20cm、上端の標高は59.9m前後である。既調査の成果から、北面でも同様の石敷があったとみられる。

４　まとめ

本調査により、北面、南面階段の創建の規模および構造を確定することができた。その後の改修や付替えの痕跡は確認できず、両階段とも創建時にのみ構築されたとみられる。階段外周部には基壇外周部と同様に、犬走り、雨落溝、石敷が廻ることもあきらかになった。　**（前川）**